

## 河童〈かっぱ〉松（三原町志知）

西淡町の志知松本というところに、伊勢〈いせ〉明神と呼ばれている神社があり、古い大きな松が生いっげっていた。（今は三原町になっている）世の中がみだれ、戦争〈せんそう〉がたえなかった大昔のある日のこと、戦争につかう馬が小川の岸につながれていた。そこへ一人の法師〈ほうし〉に身を交〈か〉えた河童〈かっぱ〉がやってきた。

「ひひひ…ん。」

馬はびっくりして、とびあがりいなないた。

「たすけてくれ。」

といわんばかりに馬はもがきはじめた。

河童は、馬を水底に引き込もうとしているのである。たまらなくなった馬は後ずさりをして、足を左右に上げはねだした。河童〈かっぱ〉はその中、馬の尻〈しり〉に手を入れはじめた。馬は、

「何をすんだ。」と言わんばかりにうしろをむいてはげしくていこうをした。

河童は、さらに深く手を入れて、馬の腹から胆〈きも〉をつかみだそうとした。馬はたまったものじゃない。

おどろきあわてた馬は、一目散〈もくさん〉に駆〈か〉けだした。いたずらっ子の河童は馬の尻に手を入れたまま、どうすることもできない。馬の尻で手をしめたまま引きずられていった。とちゅうで、こんどは、河童の方が、

「たすけてくれ…、たすけてくれ…。」

大きな声で叫べは叫ぶほど、馬はよけいかけだした。河童はころがるように引きずられて伊勢〈いせ〉の明神さまの境内〈けいだい〉までくると、一人の里人にみつけれ、たちまち捕〈とら〉えられてしまった。大ぜいの里人たちがあつまってきた。いろいろしらべてみると、方々で、いたずらをしてはにげまわったり、めいわくをかけていることがわかった。里人たちは口々に、

「河童を殺してしまえ。」

「つみのつくないをせよ。」

と、ののしった。

河童はあわてて叫んだ。

「これからは、いっさいこの土地の人たちや、牛馬にいたずらをしたり、害をあたえたりはいたしません。どうかおたすけ下さい。」

と、目になみだをためてあやまった。

里人たちはそれでも許〈ゆる〉そうとしなかった。縄で大きな松にしばろうとした。河童は、何度も手を合わせてあやまった。

里人たちは、

「こんど、こんないたずらをしたら承知〈しょうち〉しないぞ。」

といっしてしばりかけていた松の木から縄を解〈と〉いて放〈はな〉してやった。

河童はよろこんで、

「ありがとうございます。ごおんはけっして忘れません。」

といっして、かけだしていった。

それからのちもときどき、この松の下へきて雨の夜をすごしていたという。

以後この松を「河童松〈かっぱのまつ〉」と呼んでいる。松の木はさらに大きくなり、付近をおおっている。そして、今なお語りつがれて子供たちのいごいの場となっている。

